

神奈川県考古学会

考古かながわ

第14号

1998年3月31日

弔 辞

神奈川県考古学会会長

寺 田 兼 方

神奈川県考古学会にとりまして、平成9年の11月は、今後永久に忘れられない月となりました。まず、11月4日に初代会長の日野一郎先生が他界されると、12日後にその後を追うように第2代会長であった岡本勇先生が永眠されました。相次ぐ悲報を受け取った時には、全く茫然といたしました。本会にとりまして、大切な礎（いしずえ）でありましたお二人の顧問をほぼ同時に失ってしまったことは、誠に掛け替えのない大きな損失であります。

日野先生は、武相学園高等学校長という重要な教職にあられたばかりでなく、そのお人柄から人望が篤く、神奈川県高等学校野球連盟の会長をお勤めになられて、本当に御多忙な毎日を送られていましたが、その傍らでいくつもの発掘調査団の団長をお引き受けになれるなど、あの華奢なお体のどこにその力を秘めておられるのか不思議でなりません。その上、本会の会長としても、役員会や諸行事には必ず御都合をつけて欠かさず御出席下さいました。役員会では熱心に討議を進められて、そのまとめ役として中心となられ、また、諸行事には会長として御挨拶をいただいております。

また、岡本勇先生は、戦後間もない頃の日本考古学を、若さと情熱を以て先頭に立って切り開かれ、数多くの業績を挙げて来られました。そして、後に続く若き学徒にとっては、最良の指標として常に大きな存在感がありました。晩年には、体調を崩されて、復活の努力を重ねておられると伺っておりましたが、そのために、本会の会長としては、その豊かな才学を十分に発揮していただくことができなかったのが、誠に残念であります。しかし、まだまだ沢山のお仕事を手掛ける御計画をお持ちであったものと拝察いたしますと、さぞかしお心残りの御最期ではなかったかと思われてなりません。

ここに、神奈川県考古学会の会員一同を代表いたしまして、日野一郎・岡本勇両先生の御逝去に対し、深い哀悼の意を表すと同時に、衷心よりお二人の安らかな御冥福をお祈り申し上げます。今後は、お二人の御遺志を確実に受け継いで、神奈川県考古学会の隆盛と発展に、役員一同が全力を傾けて努力することをお誓いいたしまして、弔辞といたします。

日野一郎先生を偲ぶ

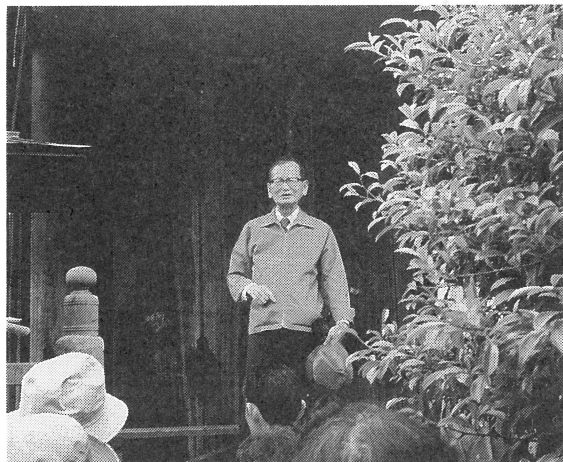
小出義治

先生は大正4年(1915)の12月10日東京の神田でお生まれになったと聞いている。生粋の江戸っ子である。昭和10年(1935)に第二早稲田高等学院を卒えて早稲田大学文学部史学科国史専攻に進まれ、西村真次先生の教えを受けられて昭和13年(1938)優秀なご成績で卒業されると、助手として大学に残られた。

しかし、どういう事情か一年にして神奈川県立吉田島農林学校教諭として移られ、以来先生と神奈川県との関係が始まったのである。その頃の日本は大陸侵略の戦禍を日々に拡大しつつある時であり、先生の身边にも召集令状の危惧は迫っていたことと思う。先生が昭和15年(1940)秋、学年暦を半ばに海軍教務嘱託に転ぜられたのには、その陰に先生の強い主義と主張が秘められていた様な気がしてならない。そして昭和17年(1942)には早くも海軍教授に任ぜられている。

昭和20年(1945)終戦に伴い一時建築文化研究所に籍を置かれたが、翌年(1946)4月には先生がその後生涯をかけて愛し育てた武相学園に、創立者石野瑛校長の懇望によって着任されたのである。

▼ ありし日の日野先生(写真提供:佐々木博昭氏)



私が日野先生と出会ったのは翌昭和22年(1947)のことであった。丁度50年前、遠い昔の話である。その頃私も石野校長から「大場君(大場磐雄先生)から話を聞いていると思うが、考古学を踏えた歴史の先生が必要だ。日野先生に来て頂いたが、一人では大変なので、講師として補助して欲しい」と云うようなことで日野先生に紹介された。私は当時復員学生であったが幸い教員免許状を持っていたので、以後週に幾回かは日野先生にお目にかかるようになった。しかし、新米教師の世話役は清水という教務担当の国語の先生であったので、日野先生とは親しくお話をする機会は余り多くはなかった。まして先生が当時結成されたばかりの日本考古学協会会員であることも、歴史考古学にどのような著書論文があるのかも全く知らずに過ぎてしまった。そして翌年私自身が卒業論文作成のため、辞めさせて頂くこととなった。以来先生とは時に折にふれて御挨拶はするようになったが、先生は昭和38年には早くも武相学園の校長になられ、世界が少々異なってしまった。やがて武相高校野球部の名は甲子園をわかせるようになり、先生は県高野連会長となり、一方にあっては県下数市の文化財保護審議委員や県アセス審議委員を兼ねて文化財行政に尽力され、本会の初代会長も勤められた。他方私学振興にも多大の貢献をされ、正に八面六臂のご活躍であられたが、ついに先生のお人柄と卓越した事務処理力の賜物と云えよう、昭和61年(1986)には勲四等旭日小綬章の荣誉を受けられた。

平成9年春先生は武相学園を退かれたが、その秋11月には突然のように不帰の客となられたが、更に寿齢を重ねて欲しい人のお一人であった。

謹んで御冥福をお祈りする次第である。

考古学者 岡本勇さんを偲ぶ

川上久夫

神奈川県考古学会の創立記念講演で、「後藤守一、杉原荘介、赤星直忠の三人の先生は私の師でした。」と述べられておられましたが、和嶋誠一先生からも学問や思想の面で大きな影響を受けられたのではないかと思います。

戦後の社会混乱は、日常の生活すら破壊されてしまった状況でした。その中から考古学の研究に志を抱かれた岡本勇さんは、当時17才の青年でした。明治大学で後藤・杉原両先生より教えを受け、地域にあっては赤星先生の良き後継者として、情熱的に学問研究の道を進まれました。

昭和23年度の日本考古学協会年報(1)には、神奈川県川崎市中谷遺跡調査報告と静岡県熱海市桃山遺跡の調査報告を公表され、同年刊行された東京考古学会の考古学集刊(1)には「原始絵画のある紡錘車」を考察した文章を書かれています。これらは19才の時のお仕事です。その後、縄文土器の発生と発展について強く興味を持たれ、先輩研究者の方々と共に精力的に問題を追求されていきました。横須賀市平坂貝塚において「日本最古の人骨を発見」と科学朝日に報じられたのは昭和24年のことでした。

真摯な態度で研究する姿は若年ながら見事でした。立教大学に職を奉じてからは、幾多の後輩を育成され、日本考古学界の指導的研究者として高い世評を受け、岩波歴史講座にその研究成果を論じていた頃もありました。順風満帆な人生も、決して恵まれた経済生活とは云いがたいこともありました。青年期に幼い妹を残して母が死亡、父親や兄たちと共に借家を転居する時もありました。

同学の朋友として戦後から50余年、共に歩んできた岡本勇さんが67才を一期として他界されましたが、彼が追求し生涯をかけて蓄積された研究の成果を、世に残す時間は足りませんでした。そのことが悔や

まれてなりません。約20年の歳月をかけて実証した横浜の港北ニュータウン遺跡群の調査は、各地遺跡群調査の先鞭をつけたものでした。この調査における考察の方法や研究の手段は、大学を退職して賭けた研究者としての人生ではなかったでしょうか。

亡き母を慕い、友人と酒を愛した心情と、平易にして内容の濃い文章は「岡本さんの文には詩情が漂っている」と評した人もおりました。

神奈川県考古学会の会長になられた頃は、病弱な体になっておられましたが、倒れるまで考古学の研究者として誇り高く生き抜いた人生に拍手喝采を贈り、惜別の情やみがたい寂然とした心の中で、深く御冥福をお祈り申し上げます。



▲ 平成3年9月の岡本先生（本会の遺跡見学会にて）

第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会が小田原市にて開催される

1997年9月14日(日)に小田原市中央公民館において第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会が開催されました。当日は神奈川県の西のはずれという地理にもかかわらず、天気にも恵まれ約400名の参加者があり、なかなか盛況でした。

まず、開会の挨拶が寺田兼方会長からあり、続いて、開催地として杉山博久小田原考古学会会長から挨拶の後、昨年度注目された10遺跡について発表が始まりました。また、地元小田原市の文化財パネル展も会場ホールで行われました。

午前の部

1. 藤沢市用田バイパス関連遺跡群(栗原伸好氏発表)では、旧石器時代の出土炭化材の詳細な報告とガラス質黒色安山岩製尖頭器の製作跡を中心に報告がされました。

2. 相模原市田名向原No.4遺跡(麻生順司氏発表)では、旧石器時代の住居か?と全国的にも注目を浴びた石器製作跡と多孔質安山岩製礫の集中、柱穴9、炉跡2など住居を構成する条件がそろった重要な遺跡の報告でした。また、大量の黒曜石製の尖頭器は信州系黒曜石が主体を占めていることが明らかにされ遺構の性格が暗示されます。

3. 小田原市御組長屋跡(小林義典氏発表)は縄文時代後期の敷石住居、石積遺構が海拔12mの低地から検出されたものでした。また、併せて中世から近世へと連続と続く居館的な遺構についても報告がなされました。

4. 三浦市松輪間口東海蝕洞穴遺跡(釘持輝久氏発表)は、三浦半島で特徴的な海蝕洞穴遺跡から初めて縄文時代後期の土器が貝層やマダイなどの魚骨とともに出土したことや、洞穴が10世紀以降まで利用されていたことなどが報告されました。

5. 小田原市千代仲の町遺跡第IV地点(諏訪間順氏発表)では、千代廃寺の寺域などの区画を示す可能

性のある溝、弥生時代後期の環濠の可能性のある溝や住居址の調査の報告がありました。出土した「厨」銘の墨書土器の存在から、足下郡衙の所在地が千代及び周辺にある可能性が高くなったこと、弥生時代には中部高地系「箱清水式」や西遠江の「山中式」や東遠江の「菊川式」などの遠隔地の土器が多く見られることから、広域交流の拠点であったことなどを発表しました。

昼休み後、午後1時から記念講演が静岡大学教授・小和田哲男先生によって行われました。演目は、「戦国史研究と考古学の成果-NHK大河ドラマ『秀吉』の時代考証の経験から-」ということで、昨年話題になった秀吉の時代考証を担当された経験を踏まえて、戦国史研究の現状と考古学の成果を取り混ぜてお話がありました。歴史学・考古学・民俗学の学際的な研究の必要性やますます考古学の成果が重要になるとの発言もありました。

午後

6. 厚木市船子・宮の前遺跡(中村喜代重氏発表)は、弥生時代中期から後期の方形周溝墓群、土器棺墓、奈良平安時代住居址の調査の報告が行われた。また、前方後円墳として知られる地頭山古墳の隣接地であり周溝の位置を調査したにもかかわらず周溝が検出されなかったことも重要な点として指摘されました。



▲ 寺田会長の開会あいさつ

【河村城址見学記】

小 暮 中 和

12月6日(土)午後1時、山北駅前集合、参加者22名。冬という気候がうそのようなぼかぼか陽気の日であり、ハイキング日和の1日であった。駅より15分足らずで、城址入口に着く。急坂をあえぎあえぎ登り、茶臼郭の所にて畝堀の跡をのぞき込む。後北条氏の時代に作られたようだが、郭と郭の間を掘込んで敵が攻めにくいようになっており、初めて見る畝堀の跡に工事の大変さを実感する。本城郭から蔵郭、近藤郭、大庭郭と廻ったが、非常に保存状態が良く、本格的な発掘と整備が待たれるところである。貴重な山城跡を見学できて、大変勉強になった。今回の見学会は天気も良く、和やかな雰囲気の中で1日のんびりと歩いたが、女性の方は1名のみの参加で、次回より多数の女性会員の参加を期待するものである。幹事の方に感謝…………。



▲ 発掘中の河村城跡



▲ 参加者そろって“ハイ、チーズ”

7. 川崎市久地西前田横穴墓群(第2次)(野中和夫氏発表)では3基の横穴墓の調査報告で、第2号横穴墓から木棺を確認したこと、太刀、刀子、須恵器などの豊富な遺物が出土したなどが報告されました。

8. 川崎市橋樹郡衙関連遺跡(河合英夫氏発表)では、橋樹郡衙の正倉と推定される建物跡を検出された千年伊勢山台北遺跡と、正倉の補完的役割を果たしていた収納施設が検出された蓮乗院北遺跡の報告がありました。

9. 鎌倉市由比が浜南遺跡(斎木秀雄氏発表)では、13世紀後半から江戸時代までの4期の遺構面が確認され、特に第3期とされた14世紀から15世紀前半には、3,000体以上の人骨と多量の獣骨(馬・牛・イルカ・鯨)が出土し、都市的な遺体処理地であろうと考えを述べられました。スライドによる人骨の集積状況は非常にリアルでした。

10. 史跡小田原城跡二の丸住吉堀の調査・整備事業(塚田順正氏発表)では、昭和58年より本格化した二の丸住吉堀の調査から石垣復原、そして銅門復原までの史跡整備の事例を報告しました。調査によって、堀底にも戦国時代以前から現代までの歴史が刻まれていることが述べられました。

今回の発表要旨には3本の紙上発表も掲載しました。

11. 平塚市高間原遺跡(秋田かな子・田尾誠敏・峰岸維津子・宮田明子)ー県内で数少ない古墳時代中期(和泉式)の集落の調査ー

12. 小田原市小田原城下町遺跡(小林竜一・上石統子・諏訪間順)ー江戸時代の町屋遺跡である中宿町遺跡第Ⅲ地点、欄干橋町遺跡第Ⅴ地点の調査報告ー

13. 史跡相模国分寺跡僧坊跡(須田誠)ー史跡整備に伴う相模国分寺跡僧坊跡の調査で三時期の建物跡を検出ー

発表終了後、伊東秀吉副会長より閉会の挨拶があり、無事日程を終了することができました。

(諏訪間 順)

“平成9年度考古学入門講座開催される”

考古学入門講座は、横浜市開港記念館講堂において去る2月22日、百名前後の会員や一般参加者の出席によって開催されました。

本会会長である寺田兼方先生の挨拶に引き続き、今回の主題『神奈川の古墳—その出現と展開—』にあたって、まず遠藤秀樹さんによって「その出現と展開を考えるにあたって」と題する問題提起がなされ、3～5世紀（横穴式石室導入以前）の日本の古墳の様子や古墳に先行する「墳丘墓」について分かりやすく時代背景や古墳被葬者、古墳の年代のものさしを発表されました。最後に、古墳の規定概念について前方後円墳と前方後方墳の在り方にふれ、古墳時代をどの様に定義したらよいか、具体的に古墳の墳形や出土遺物について話され、これらのことを踏まえて、本日、基調報告者の皆さんによって明らかにされることを示唆されました。

基調報告は、「川崎の古墳」を浜田晋介さんがスライド写真を交えて発表されました。三角縁神獸鏡を出土した川崎市加瀬白山古墳と横浜市日吉観音松古墳の先後関係を埋葬施設から明らかにされ、白山・観音松古墳に続いて加瀬台4号墳、横浜市矢上古墳、加瀬台8号墳へと引き継がれていくことを述べられました。「横浜の古墳」は、鈴木重信さんがスライド写真を交えて発表されました。出現期の古墳が立地

する同一丘陵上にはその多くに弥生時代後期の集落址が発見されること、初期の首長墓とみられる古墳はどの古墳群でも2～3代でその造営が途絶えることを指摘されました。「三浦半島の古墳」は、稲村繁さんによって藤沢市域を含めて発表されました。古墳（高塚墳）出現以前の墓の在り方から、三浦半島では古墳時代に入っても弥生時代の墓制がしばらくのあいだは続いていたこと、現在まで確認できる最古の古墳は横須賀市長沢1号墳であり、その年代は5世紀中葉でもやや新しい時期であることを明らかにされました。「東相模の古墳」では服部みはるさんが、担当された古墳のスライド写真を交えて発表されました。東相模の前・中期の古墳は相模川中流域に集中していること、前方後円（方）墳とともに方墳が先行して築造された可能性があること、同時代の集落が東相模地域南部に集中していることを明らかにされました。「西相模の古墳」は、立花実さんがスライド写真を交えて発表されました。愛甲大塚古墳は、調査の成果から円墳ではなく前方部が撥形に広がる全長70～90mの旧相模国でも最大の前方後円墳になる可能性があること、併せて同古墳出土の土器を新資料として明らかにされました。

資料報告は、「平塚市塚越古墳」を西川修一さんがスライド写真を交えて発表されました。トレンチ調査の成果に基づき墳形復元案を図示され、従来前方後円墳とされていた墳形を前方後方墳の可能性であることを明らかにされました。「大田区宝萊山古墳」は、野本孝明さんによって発表されました。柄鏡形の前方後円墳とは異なる前方後部撥状の前方後円墳であることを明らかにされました。なお、討論会については後日、成果集として発表する予定ですのでご期待下さい。（後藤喜八郎）



▲ 熱心に発表する報告者のみなさん

役員会記録

平成10年度総会と 報告会のお知らせ

第1回：平成9年4月25日(金) 午後6時30分～

かながわ県民センター

- ①平成9年度総会について
- ②遺跡調査・研究発表会について 他

第2回：平成9年5月31日(土) 午前10時～

神奈川県立埋蔵文化財センター

- ①平成9年度事業計画案について
- ②平成9年度予算案について 他

第3回：平成9年7月4日(金) 午後6時30分～

かながわ県民センター

- ①役員の役割分担について
- ②遺跡調査・研究発表会について 他

第4回：平成9年9月5日(金) 午後6時30分～

小田原市中央公民館

- ①遺跡調査・研究発表会について 他

第5回：平成9年12月1日(月) 午後6時30分～

かながわ県民センター

- ①見学会・考古学講座について 他

第6回：平成10年1月22日(木) 午後6時30分～

かながわ県民センター

- ①遺跡調査・研究発表会報告について
- ②平成10年度総会について 他

第7回：平成10年3月24日(火) 午後6時30分～

かながわ県民センター

- ①平成10年度総会について
- ②平成9年度事業進捗について 他

平成10年度総会と報告会を下記の通り開催いたします。

- 1 日 時 平成10年5月30日(土)
午後1時～4時45分
- 2 場 所 かながわ労働プラザ (下図参照)
- 3 内 容 午後1時 (1) 総会
午後2時 (2) 「'97 かながわ考古
トピックス」

- ① 旧石器時代
- ② 縄文時代
- ③ 弥生時代～古墳時代前期
- ④ 古墳時代後期～古代
- ⑤ 中世・近世

募集

本誌では、神奈川県の考古学史・調査史に関わるエピソードや秘蔵写真の発掘も手掛けていきたいと考えています。

皆様からの有益な情報提供または資料の発表を期待しています。御理解・御協力のほど、よろしくお願ひします。



情報案内

会員名簿

《新入会員》(50音順) 平成10年3月31日現在

安西晴美
石井利江
岩田和子
岩崎厚志
遠藤利久
岡野則夫
小山内薫
川口正行
川又隆央
小林健司
小林晴生
滝沢晶子
高橋和
高倉純
塚田寛幸
坪井志津子
富塚義男
中田英
中村哲也
中山良
乃村晴久

村越功夫
森孝子
山口朋子
横山太郎
吉田政行

*平成10年度に会員名簿の改訂を行う予定です。

展示会

(1) 特別展:「木と民具 -暮らしの知恵と工夫-」

平成10年3月21日(土)~5月5日(火)

神奈川県立歴史博物館 ☎045-201-0926

(2) 特別展:「大和まほろぼ

-よみがえる古墳時代の王権-」

平成10年4月4日(土)~5月10日(日)

*緊急出展…黒塚古墳の三角縁神獣鏡(4/14~)

府中市郷土の森博物館 ☎0423-68-7921

編集後記

平成9・10年度の連絡誌担当は4名で、1名1号の責任編集ということで始めています。私も初めて編集に携わりましたが、おもしろい誌面作りに四苦八苦する始末。どうぞ皆様の御意見や御感想をお寄せ下さい。

さて第14号は、本会設立以前から神奈川県考古学界に大きく寄与されてきた日野・岡本歴代会長の追悼号とさせていただきます。両先生の安らかな永遠の眠りをここに祈りたいと思います。合掌。(ど)

考古かながわ 第14号

発行 神奈川県考古学会
発行日 1998(平成10)年3月31日
編集者 白石浩之・大塚真弘
明石新・土井永好
事務局 東海大学文学部考古学研究室内
〒259-1207 平塚市北金目1117
郵便振替00240-9-71208
神奈川県考古学会
印刷所 コジマ印刷